低い玄關で解かれた。……大正七年十月八日第一日行程。

文四　せつ子

吾をせめ吾をなやむるおそろしき、くしき惡魔はわが心なり
とまりたる時計と吾と剝製の小鳥のほかは何物もなし
不具な子を持ちたる母の心地しておのが心は吾をみつむる
まだ知らぬ清き世界を吾は見き物も覺えで病みてある時
世の中に殘しゝおのが足跡は小さけれども尊しと思ふ
かろやかに物も云ひ得ぬ子となりぬこのをのゝきにおそはれしより
あるかなき朝の風にもうちふるふ、アスハラカヌとおのが心と
世の中のすべての人が何となく吾がはらからの心地こそすれ
此れもよしあれもまたよし何物も皆よし今日の吾が心には
いつまでも一つの道をめぐり居る走馬燈見て吾を思ひぬ
みにくさをかさねていとも美しき物を思へるこの女かな
喜びも悲しびも皆わが胸の尊きたから人にもらさじ
人間のなす事皆がふつゝかに思はるゝかな此頃の吾
おのがみをめでたきものと思ふこと今宵始めて吾は知りけり
初冬の夕日の町を歩みゐて昔の友にふと逢ひにけり

湖　しづ枝

くもしろき大空のかげふか〳〵とうつしてすめる山の湖
旅にして一人むかへば湖のとほくひろきも悲しかりけり
山かひの小さき沼に菱とりし乙女のわれはやすかりしかな
ひとり〳〵したしき人とはなれゆくかなしみにゐてこがらしをきく

しばらくは目をとぢてきく天地のなげきより來るこがらしの音

秋　咏　さふらん

旅にしてはや夕ぐれの山々も見つゝつかれて君をこそ思へ
遠旅のこゝろかなしく夕暮のみしらぬ驛にともる火を見つ
今ははやみちのく遠くはなれきて見しらぬ驛にくれはてにけり
京もはや近つきにけりをち方の空にあかるくはゆるともし火
さら〳〵と葉すれかすけくつきよみの光のかげにゆらく穂すゝき
つきよみの光にしるくわくら葉を風にならして立てる木のみゆ
ひる時雨はれにけらしなひさ方の空はほのかに白みそめつも
そろ〳〵とたゝなはりつゝ五百重山夜の天のもとにもたしたるかも